

～出エジプト記を読んで感じること～ (14) ファラオの王女

モーセに率いられて奴隷の民イスラエルがエジプトから脱出する物語は、紀元前6世紀のバビロン捕囚の時代に書かれたと言われています。その時の喜びを、奴隷として苦難を味わったエジプト逃亡の故事になぞらえ、物語化して、「出エジプト記」が生まれたのでしょうか。古代のイスラエル人の思想の構想力、信仰の表現力、また物語の展開力などは、驚くべきものです。緻密な記録、描写があります。また、舞台設定として、登場人物を常に強大な世の権力に拮抗させる姿勢など、出エジプト物語でも如何なく発揮されているわけです。残忍なファラオの、ある意味で敵の懐の中で育った主人公として、モーセが登場します。



ファラオの娘とモーセ Marc Chagall

ひとりのファラオの王女が水浴びをしようとナイル河畔にやって来ました。王女が川に下りている間、仕え女たちは川岸を行き来して、用心深く王女の水浴びを見守っていました。その時王女は葦の茂みの中に、籠をみつけたのです。すぐに仕え女を取りに行かせ、開けてみました。その中で男の赤ん坊が泣いていたのです。彼女は赤ん坊がヘブライ人だと分かりました。「ヘブライ人の乳母を呼んでみましょうか」という少女を信用し、乳離れするまで手当を出すとって、母親に委ねました。この事態を見て彼女は不憫と感じとったのです。父であっても、その残酷な嬰兒虐殺の命令を、彼女は受け入れることはできなかったのです。

乳離れしたころ、赤ん坊を引き取り、モーセと命名しました。モーセにはヘブライ人であると、出自を伝えましたが、他には知られないように、自分の養子と育てました。王宮で王子としての教育を施しました。モーセの高潔な堂々とした振る舞い、民を一つにまとめるため、強制力を持つ律法作成などは、彼女がモーセに王子として与えた教育の賜物でしょう。彼女ほど賢く、心優しい王女は聖書にはいません。

王宮の生活はどのようなものであったかは、聖書には全く書いてありません。無名の王女で、モーセの養母です。王女とはいえ、彼女も王宮で自由の身とは言えなかったでしょう。

エジプトはラムセス2世（紀元前13世紀頃）の頃、最も強大な権力を持ち、国が繁栄し頂点に達した、とあります。彼には96人の息子、60人の娘がいた記録が残っています。ファラオの王女たちは政略結婚をしていきますが、王女たちの中から一人選ばれて、異母兄弟であるファラオの妃（兄弟結婚）となり、共に統治する例が多いとのこと。

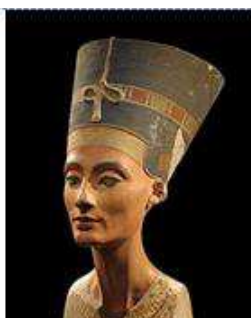
ちなみにエジプトの4大美女と言われている王女・女王は次のとおりです。

1位 クレオパトラ



51- 30 BC (統治)

2位 ネフェルティティ



?-1330 BC

3位 ハトシェプスト



c. 1479-1458 BC

4位 ネフェルタリ



?-1250 BC (ラムセスII妃)